

平成28年度

学びに向かう力育み事業

取組のまとめ

平成29年3月

滋賀県教育委員会

目 次

はじめに	1
大津市立瀬田南幼稚園	2
わくわく、のびのび、いきいき生活する子どもを育てる ～一人ひとりを大切にする保育～	
長浜市立にしあざい認定こども園	4
心も体も元気いっぱいきららっこ ～いろいろな運動あそびや体験活動を通して自己発揮できる子を 育むために～	
守山市立吉身幼稚園	6
学びの芽生えから学びの基礎へ	
東近江市立八日市幼稚園	8
健康でたくましい心と体を育み、友だちとともに育ち合う子ども をめざして ～子どもたちのやる気を引き出すために～	
愛荘町立秦荘幼稚園	10
自ら遊びに参加し、友だちと夢中になって遊べる子を目指して ～やってみたい、やってみよう、もっとやってみたい～	
資料	12
I 学びの基礎指導の手引き（改訂版）（抜粋）	

はじめに

県教育委員会では、昨年度から、幼稚園・認定こども園等での教育・保育のより一層の充実と、小学校以降の教育との円滑な接続を目指し、「学びに向かう力育み事業」を実施しております。指定を受けた園においては、それぞれの地域や園に合った方法で研究を推進し、教育・保育の充実や教育課程の見直しを図っていただきました。また、本年度10月～12月に、指定園で開催いただきました公開保育・研究協議会には、県内幼稚園、保育所、認定こども園、小学校等から、多数の先生方に参加いただきました。公開保育・授業の参観や分科会別協議、講演をとおして、本県の幼児教育を一層充実するための機会になったと感じております。

さて、新幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示され、平成30年度から全面実施されます。

今回の改定では、3歳児以上の教育について整合が図られ、幼児教育としての共通性が確保されました。また、幼児教育から高校教育をつなぐ柱の一つとして、「学びに向かう力・人間性等」が示されました。

この「学びに向かう力」の育成は、本事業がめざす、本県の幼児教育の方向性と同じものであるといえます。

このたび、まとめていただきました指定園の実践は、幼児教育での「学びに向かう力」を明らかにするとともに、「学びに向かう力」を小学校以降の教育に接続し引き継ぐ手立てについて、多くの取組の中から、凝縮した内容を掲載しております。具体的な取組をヒントにしていただきながら、それぞれの校園でますます研究を進めていただき、幼児教育の充実と、幼小の円滑な接続に一層努めていただきたいと思います。

最後になりましたが、本指定事業に熱心にお取り組みいただきました指定園ならびに、指定園の研究を支えていただきました市町の担当課の皆様、研究に協力いただいた教職員の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課

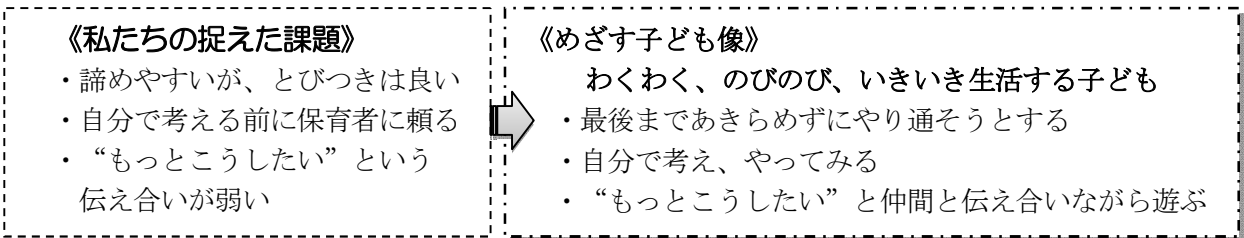
課長 西嶋 良年

研究主題：わくわく、のびのび、いきいき生活する子どもを育てる

～ 一人ひとりを大切にする保育 ～

1 主題設定の理由

瀬田南学区は瀬田川流域という交通の利便性もあり、奈良時代より栄える歴史と文化の町である。幼稚園の改築時に保育園も新設され幼保が同じ施設内で生活するようになって3年目になる。瀬田南学区の幼・保・小で話し合う中で共通する瀬田南学区の子ども達の課題を捉え、本園での目指す子ども像を考えることにした。



そして、目指す子ども像に迫るために、

・安心して過ごせる場 ・思わずやってみたくなる遊び ・支え合い響き合う仲間づくり
 (平成27年度に瀬田学区の保・幼・小・中で共有した教育・保育の視点でもある)

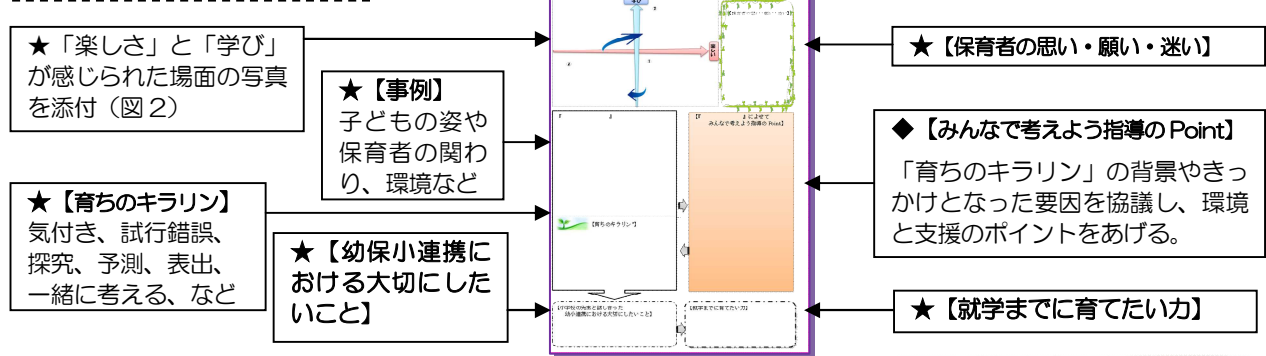
この3点を大事にした保育を通して、学びに向かう力を育むために必要な指導力や小学校との連携について探ることにした。

2 研究の方法

(1) 幼稚園・保育園の事例から指導のあり方を改善(焦点化)する

- ① 安心して過ごせる場・思わずやってみたくなる遊び・支え合い響き合う仲間づくりの3点を大事にした保育をする。子どもの姿から「楽しさ」と「学び」が感じられる場面(以下【育ちのキラリン】と記載)を見つけ学びのエピソードシート(以下4【まなエピ】シート:図1)に記入。
- ② 【まなエピ】シートに記入した【育ちのキラリン】について、なぜ子どもの姿がキラリとひかると感じたか、その姿が生まれた要因は何かを考え、協議しながら指導のポイントをまとめる。
- ③ 何を【育ちのキラリン】と感じ、どういう指導が望ましいか協議する中で、幼・保・小の校種による視点の違いや共通点を取り上げ、保育改善や指導力の向上に生かす。

図1 『まなエピ』シート



(2) 幼稚園・保育園・小学校が互いの保育や授業を見合う

共通する「目指す子ども像」にどうアプローチするか、その方法の相違点や共通点を探り、小学校への接続を意識した保育の在り方について考える。

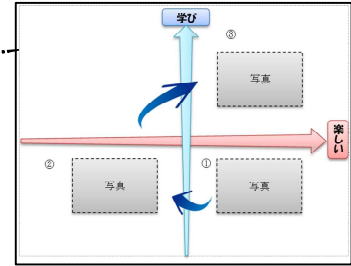


3 研究の内容

(1) 『まなエピ』シートの分析から保育者の指導のポイントをまとめる

図2 「楽しい」と「学び」の座標軸

【まなエピ】シートには「楽しさ」と「学び」が感じられた場面を「育ちのキラリン」と名付けて取り上げ、そのきっかけとなった背景（保育者の関わり、環境、友だちとの関わり）を分析する。（図2）「楽しい」と同時に「学び」も膨らむような子どもの変容には、どのような要因があったかについて考察する。



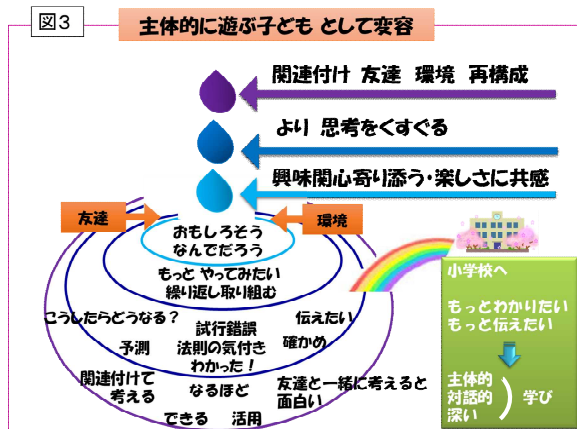
◆本園の考える「楽しい」「学び」とは

- 「楽しい」とは… ・おもしろそう ・やってみたい ・夢中になる ・自然と笑顔になる
 ・繰り返しやってみたくなる ・友だちと一緒にしたくなる
- 「学び」とは… ・問題解決にむかって試行錯誤する ・納得する ・経験を次に生かす
 ・自信をつける ・遊びの中の法則性に気付く

(2) 子どもの学びの深まりと保育者の関わり関係性を探る

【まなエピ】シート（実践事例）から、保育者の関わりと学びの深まりを「楽しい」と「学び」の座標軸の上で考えながら子どもの姿の変容を捉えると、変容のきっかけを生むのは保育者の関わりであることが多い。そこには保育者が語る言葉だけでなく、環境構成、環境の再構成、友だちとの響き合いのきっかけづくりなど、様々な要因がある。大切なことは「保育者にしてもらった」のではなく、子ども自身が「自分でやった」と思えるような仕掛けであると考えて。そこで、保育者の関わりを「💧（しずく）」、学びの深まりを「波紋」で表し、保育者の関わりと学びの深まりの関係性を図3のように表し分析に生かすことにした。

図3 「学びの深まり」と「保育者の関わり」



4 幼児期の学びに向かう力を小学校へつなぐ取組

目指す子ども像は同じでも、そのアプローチの方法は幼児期と小学校は異なる。

幼児期での学びが小学校の学びへとつながるために、互いの保育や授業をまず見合い、さらに事後の研修会で話合うことにより、互いの教育の内容を知り、相違点や共通点に気付くことができた。

5 研究の成果と課題

子どもの姿の背景にある気持ちや要因について、【まなエピ】シートを紐解きながら考察することで保育改善のヒントを得ることができた。日々の保育の振り返りは自己反省だけに終わりがちであったが、【まなエピ】シートは自己反省を保育改善の意欲につながるものへと変えていった。環境の再構成、友だちとの関わりなど、【育ちのキラリン】を生むための指導のポイントをまとめることが、明日の保育に臨む心構えにつながった。また「楽しい」だけでなく「学び」の視点を取り入れることで、小学校の先生方から、保育を単なる遊びでなく教育であると感じたという声を聞くことができたのも成果の一つである。これからも校種を超えて子どもを中心にすえた研究を継続し、公立のスタンダードとして学び合いを進めた実践について発信していきたい。

めざす子ども像へのアプローチの「共通点」

- 一人ひとりの思いを丁寧にくみとり、内面理解し寄り添う
 ➡ **安心して過ごせる場**
- 知的好奇心をくすぐる
 ➡ **思わず身を乗り出す遊びとの出会い**
- 実体験を通して心を揺さぶり、豊かな心（感受性、思いやる心、など）を育み、友だちと一緒に過ごすことを心地よく感じられるようにする
 ➡ **支え合い響き合う仲間づくり**
- たくましい体づくり（運動遊びや様々な活動を通して操作性を養う）

研究主題：心も体も元気いっぱいきららっこ

～いろいろな運動あそびや体験活動を通して自己発揮できる子を育むために～

1 主題設定の理由

本園は、琵琶湖の北側に位置し、緑豊かな地域である。3世代のつながりが強く、地域の方も温かく子どもを見守ろうとする風土がある。

子どもたちは、純朴で素直な子が多く真面目でおとなしい。これは良い面ではあるが、自分の意思を表現することに対しての弱さともとれる。そこで、子どもたちに“自主性や主体性”をもつてのびのびと行動していくための“たくましく生きる力”を育てたいと考え、平成23年度より、体を使った遊び（リズム運動・体操・リトミック・運動プログラム）を積極的に保育に取り入れる取り組みを進めてきた。

このような取り組みを進める中、リズムに合わせて様々な動きを楽しんだり、固定遊具に触れたりする機会が増えるなど、多くの子が体を動かすことに気持ち良さを感じるようになった。また、ケガが減り、体力が付いてきたことで活動後も疲れにくくなるなど、身体面では着実に成果があらわれている。しかし、自己発揮の面では、まだまだ自分の思いを出せずにいることも多く、また、言われたことは出来るが自分から行動することが苦手であるなどの課題もみられる。

そこで、今年度はいろいろな運動あそびや体験活動を通して「自分の思いを十分に発揮ができる子」をどのように育んでいくのか、また、「学びのサイクル（下図参照）」につながる環境構成や保育者の援助のあり方について探りたいと考え本主題を設定した。

研究構想図

2 研究の目標

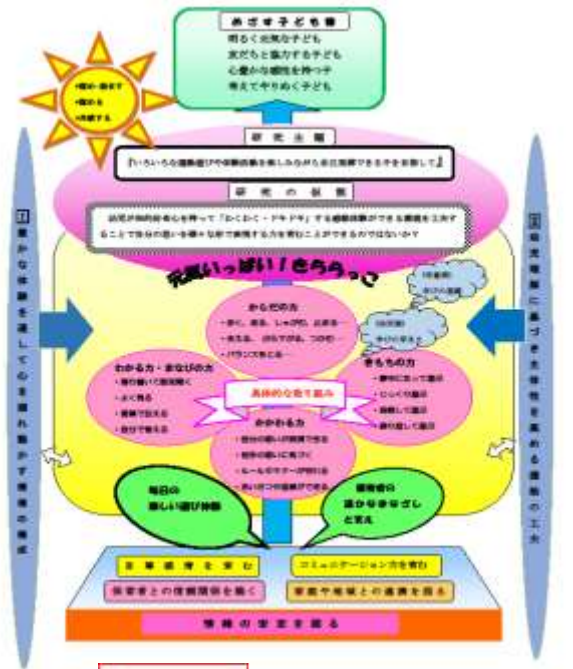
各年齢の特徴（発達段階）に応じた環境・支援のあり方。

※小学校へのなめらかな接続を意識し、乳幼児期に育てておきたいこと

年齢	テーマ	保育者の援助・環境設定	
012歳児	甘えや怒り喜びなど安心して自分の欲求や思いを表現できる環境や援助について	・一人ひとりの欲求や甘えを十分に受け止め心の安定を図る。 ・安全で自ら活動できる（生活・遊び）環境。	安心感
3歳児	安心して過ごす中で、体を動かして遊ぶことや思いを表現することの楽しさを感じるには	・不安な気持ちを受け止め、安心できる関係を作る。 ・面白さを感じ、繰り返し遊びこめる環境。	
4歳児	保育者や友だちとかかわる中で、自信や意欲につながる環境や援助のあり方について	・一人ひとりの姿を見取り、意欲や自信を持って取り組めるようにかかわっていく。 ・繰り返し自発的に遊ぶことの出来る環境。	
5歳児	活動の楽しさやクラスのつながりを感じながら、挑戦意欲や自信を育てるには	・子どもの主体性を大切にしかかわり（見守りや励まし） ・子ども自身が自ら作り出せる環境。 ・協同性を意識することの出来る環境。	

小学校へのつながり

十分に養護の行き届いた環境の中、愛着形成を培い、生命の保持や情緒の安定を図る。また、子ども自身が遊びに興味関心を持ち、夢中になって遊びを創り出し、協同的な体験を繰り返したりする中で、主体性を育て、小学校につなぐ思考力や学びの芽生えを培っていく。

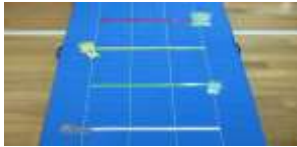


「学びのサイクル」



3 研究の進め方

- ① 子どもの姿から課題を見だし、子どもの実情を捉える（実態把握）
- ② いろいろな運動遊びや体験活動を意図的に計画していく（計画）
- ③ 研究保育や事例研究を行う（研究保育）
- ④ 子どもの内面について考える（幼児理解）
- ⑤ 子どもの姿や保育実践事例・考察をまとめ生かしていく（まとめ）

子どもの姿	読み取り
<p>【先生みてみて！】</p> <p>A児・保育者の2人が台の上からカエルジャンプをして遊んでいる。 そばでB児がその様子を見ている。 マット上には、小さいカエルからトノサマカエルまで、距離による数段階の表示がある。</p>	
<p>A 児：カエルになりきり、台の上からマットの上にあるカエルの絵表示（右写真）に向かって繰り返し跳んでいる。</p> <p>保育者：「強い足やなあ。カエルさんみたいに、しっかり手を付けてね。」</p> <p>A 児：保育者を見て笑う。再び台に乗り「いっせーのーゲロ！」と声を出す。</p> <p>保育者：「Aちゃん上手ね。どうやって跳ぶの？先生にも教えて！」</p> <p>A 児：「見てて！」「びよよよーん」 （※手を大きく上にあげ、思いきり跳んで見せた）</p> <p>保育者：「ありがとう。教えてくれて。」</p> <p>A 児：笑顔で保育者を見る。</p> <p>B 児：「ぼくも跳べる！見てて！」と保育者に目をやり、勢いよくジャンプする。</p> <p>保育者：「おお～！B君は王様がえるまで跳べたね。すごいね～。A君はどこまで跳んだかな？」と言う。</p> <p>A 児：「トノサマガエルまでやで！見てて！」と、思い切り跳ぶ。着地すると笑顔になり、すぐに保育者のほうを見た。</p> <p>保育者：「すごい！トノサマガエルまで跳べたね！」</p> <p>B 児：「ほんまや、すげー。ぼくももっと跳ばおっと」と笑顔で台に上り跳ぶ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者に「強い足」「手をしっかり着いてた」と具体的に褒めてもらったことから、さらに意欲的に挑戦する姿につながった。保育者の声かけの後、「ゲロ！」とカエルになりきった言葉がでたことから、この遊びへの楽しさが増したことが分かる。この時期、大好きな保育者に認められることは、子どもにとっての大きな自信につながり、繰り返しやってみてみたいという意欲につながる。 ・保育者が「教えて」と声をかけたことで、先ほどよりもさらに大きな動きを意識して表現することができた。保育者に笑顔を見せた様子から、A児の満足感がうかがえる。 ・B児は、A児と保育者が関わる様子に関心をもったことで、自分から保育者に対して「見てて」と主張することができた。 ・活動に消極的なB児にとっては、A児と保育者の存在はもちろん、カエルの絵表示が跳ぶ目印となり、自分なりに目的をもって挑戦しようとする意欲につながった。「やってみてみたい・もっとしたい」という挑戦意欲をかきたてるには、友だちの刺激や保育者の認め、さらには「ちょっと頑張ってみたらできた」と思えるような「自分で試しながら無理なく挑戦できる環境」がとても重要である。

5 幼児期の学びに向かう力を小学校へつなぐ取組

- (1) 西浅井地区連携協議会におけるこども園・小学校（2校）・中学校（1校）の職員合同研修、小学校教員のこども園保育参観および意見交換
- (2) 園児と児童の交流について計画を立て、実践をする。（5歳児と小学5年生の交流、5歳児と小学2年生の交流、中学生の職場体験、ボランティア活動など）

6 研究の成果と課題

今年度、「いろいろな運動遊びや体験活動を通して自己発揮できる子を育むために」というテーマのもと、各クラスの研究保育および事例検討を進めてきた。保育者が子どもの発達年齢に応じた様々な運動遊びや活動を工夫し、計画的・意図的に取り入れていくことで子どもたちの内面に「学びのサイクル」が生まれ興味・関心→挑戦→自信→意欲が自己発揮につながることや、このことが小学校への「学びに向かう力」に大きくつながっていくのだろうということが分かった。改めて就学前の子どもの遊びや生活の中には多く学びの基礎があることを認識すると共に保育者の役割の大切さを感じた。また、この取組を通して、地域の小学校の先生にも「就学前の学びが何か」を知ってもらおう機会となった。今後も小学校との連携を深めながら、環境と援助のあり方について、一層学びを深めていきたい。

研究主題：「学びの芽生えから学びの基礎へ」

1 主題設定の理由

本園と小学校は道を挟み隣接している。登下校時や休み時間には、小学校の校舎から幼稚園に向けて声をかける子どもの姿や、小学校で開催する運動会練習のために幼稚園から毎日通う等、立地的にはすぐに足を運べる距離である。吉身小学校区では、1・5交流を通して年3回、授業や保育の中で意図的に関わりをもち子ども同士の交流をしたり、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの作成をしたりして、幼小連携を図ってきた。しかし、その内容は形式的なもので、お互いが大切にしている指導観や教材観を知りえないまま進めている現状があった。そこで、それぞれの発達段階や特性に裏付けられた、“学び方”を幼小が共に理解することや、それぞれが総合的な学び、系統的な学びの中で“主体的に学ぶ姿勢”を育むためにどのような保育や授業の展開をしていくことが必要なのかを教師どうしが知り合い、考えることにこそ意味があると考え、本主題を設定し研究を進めることにした。

2 研究の目標

幼稚園、小学校の教師が保育や授業を見合い意見交換することで、互いの指導観、教材観を知る。その中で、具体的な教師の役割や援助、環境のしつらえや工夫など互いに明らかにし、幼児期、児童期の“学びの姿や過程”を検証し、子どもたちの「学びの芽生えから学びの基礎へ」学びに向かう力を育む。

3 実践事例

(1) 1・5交流のための合同指導案の作成

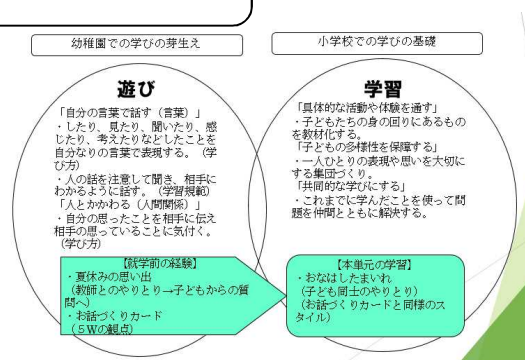
1・5交流を行うにあたり、幼稚園教師と小学校教師が、保育や学習に関わって、子どもたちがこれまで、また今どんな経験をしているのか、どんなねらいをもって実践しているのかを互いに話し合い合同指導案を作成した。その中で、互いの指導観や教材観が理解でき、互いのねらいを意識においた保育展開、授業展開につながった。

(2) 保育公開授業公開と合同の研究会、研修会

1学期：幼「戸外で春の遊びをしよう」 小「国語科 おはなしたまいれ」
2学期：幼「お店やさんごっこをしよう」小「算数科 長さ比べ」

・学期に1回、幼小それぞれが保育公開、授業公開を行い、実際の子どもの姿や教師の関わり、指導の様子を参観した。その都度、事後の合同研究会で幼小教師がそれぞれの視点で意見交換をする中で、互いの考え方や大事にしていることなどを知ることができた。2学期には、幼小で領域や教科を意識し参観したことで、より学びの連続性やつながりについて互いの理解が深まった。

・研究会で学んだことを、次の実践へと生かすことにも重点を置いた。合同研究会の他にも、互いの校内研、園内研に参加し実際に見て、話し合うことを重ねると、幼小の発達段階に裏付けられた「学びのサイクル」があることや、子どもの主体的な活動が、学びに向かう力を育み、教師の期待する確かな学びの実現につながることが見えてきた。



4 成果と課題

○教師の活動への意図や計画を明確にするための教材研究の必要性

幼稚園教育は、幼児期の特性をふまえ環境を通して行うものであるが、研究を進める中で、教材研究の重要性に改めて気づくことができた。子どもがかかわっていきこうとするすべての環境には教材のねうちがあり、子どもをとりまく環境から、子どもたちはどんな刺激を受け、どんな活動につなげ発展させていけるのか、また、その活動を通して子どもの何を育てていけるのかなど、教師自身がしっかりと教材観をもっていなければ、一人ひとりの育ち、学びに向かう力を育むことができない。一つの事例を深く研究し、教師間で話し合うことは、様々な視点から多様な教材のねうちを考えることとなり、具体的な活動展開、教師の意図や計画明らかにすることにつながり、教師自身の力となった。



色水の液の濃度、透明感、色の濃度、混色等の多様な発見ができる

花や葉っぱ等には、厚み、硬さ、色の出具合、においなど性質に違いがある

自分の考える色を作るために、使う素材や水の量、道具など自分で選ぶことができる

友だちのしていることに気づき観察したことを模倣し、自分の遊びに取り入れたり友だちとのやりとりをしたりできる

○主体的な活動が学びに向かう力を育む

幼児は自分の興味や関心の中で、くり返しくり返し“もの・こと”に向き合いながら、そのものの本質を知り、活用の仕方を理解し、習得していくといった幼児期なりの学びをしている。また、今までに自分が経験し、すでに知り得ている「わかる・できる・知っている」を拠り所として、自分のしたいことの実現や困ったことの解決など、次の高みへと向かっていく。この幼児期ならではの、もの・ことにより向き合おうとする姿を十分に認め保障していくことが“自ら学ぶ力”“主体的に学ぶ姿勢”等小学校の学びの基礎につながる、学びに向かう力を育てていくのではないかと考える。

○学びのサイクルを意識した授業保育づくり＝学びの接続

「心が動く」→「やってみる」→「試行錯誤」「できた、わかった」という学びのサイクルは、幼稚園でも小学校でも共通している。この「心が動く」ことが主体的な学びの重要な鍵であることを意識し、教師の最大の工夫と配慮がされていない保育や学習が展開されては、子どもの確かな学びにはつながらない。「学びのサイクル」を意識して、保育や授業を実践していくことが、子どもの学びに向かう力を育てていくことになる。

○教師間の授業保育の事前から事後まで語り合いによる幼小接続

幼小接続には何よりも教師同士が顔を合わせて、参観した保育や授業について、くり返し語り合うことが重要であることを実感した。いくら立派なカリキュラムがあっても、互いが実際にどんな保育教育を展開しているのか、どんなねらいをもって行っているかを見て、質問や説明をし、話し合い、感じ考えることなしでは、理解できたとは言えない。また、教師の語り合いの中で、幼稚園は小学校を通して、小学校は幼稚園を通して、自己の「幼稚園教育の在り方、小学校教育の在り方」を改めて問い直すことができ、自らの明日の保育、教育に生かしていこうとできるようになると考える。教師にも子どもと同様の学びのサイクルがあり、自ら学ぼうとしていくことが重要で、さらにそれを継続、発展させていくかが課題である。



研究主題：健康でたくましい心と体を育み、友だちとともに育ち合う子どもをめざして
～子どもたちのやる気を引き出すために～

1 主題設定の理由

◎子どもの姿と課題

子どもたちは、好奇心旺盛であるものの、生活経験が乏しいことから、遊びの工夫や遊びを
発展する力が弱く、教師の働きかけを待つ子が多い。降園後は、稽古ごとや塾などに通い、戸
外で遊ぶ経験や友だちと群れて遊ぶことが少ないため、体の使い方やバランスが悪く、友だち
と思いを出し合いながら体を使って遊ぶ楽しさを感じられないまま過ごしている。

◎小学校区の課題

- ①環境や人に関わっていこうとする力や体を十分に使って遊ぶ楽しさを感じられていない。
- ②思いを言葉で伝える方法やコミュニケーション力など人と関わる力の弱さがある。

◎研究の取組

日常生活を支える指先の力や体の使い方、バランス力を促す運動遊びを取り入れ、「もっとや
りたい」「続けたい」という意欲をもちながら遊ぶ中で生まれる感情こそ、就学以降の学びに向
かう力につながっていくと考え、自尊感情を育むための環境構成や援助の在り方を探る。

2 研究の目標

◎研究主題にせまるための考え方

仮説1 主体的に取り組む姿勢

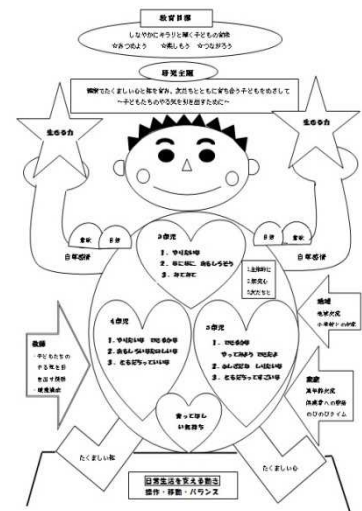
『やりたいな』『やりたいな できるかな』『できるか
な やってみよう できたよ』
○健康でたくましい心と体であればやる気を起こし何
事にも興味をもてるのではないかな。

仮説2 学びを育てる環境

『なににな？おもしろそう』『おもしろいな たのし
いな』『ふしぎだね しりたいな』
○繰り返し遊べる場や没頭できる物的環境と励ましや
支えなどの人的環境により子どもたちの意欲をそそり、
遊びを展開していく力につながるのではないかな。

仮説3 友だちづくり

『みてみて』『ともだちっていいな』『ともだちってすごいな』
○友だちと一緒に楽しめる遊びや発達に応じた遊びの環境により、心の葛藤を経て自
尊感情を育てていくのではないかな。



3 実践事例

◎5歳児・仮説による事例から

事例	子どもの姿	環境及び援助	考察
仮説1『できるかな やってみよう できたよ』◎プール遊び「だって練習したもん」	・友だちや教師の励ましがきつかけとなり本児も努力をして顔つけができるようになった。	・怖いという気持ちを受け止めたり励ましたり見守ったりする。	・「顔つけ」は恐怖心を抑えることと息を整えることとのバランスが必要であり励ましが頑張りにつながった。
仮説2『ふしぎだね しりたいな』◎泡遊び「ぎゅっとしたんやで」	・石けんを削る楽しさや泡作り、色の変化や泡のきめ細かさにこだわり作っていた。	・いろいろ試せるような材料道具を準備する。	・泡の硬さや色の変化、水の量や道具によつての泡の違いに気付いていた。
仮説3『ともだちってすごいな』◎泥団子作り「かたくなったで!!」	・「触らせて。固いしきれいやね」「いいよ」と友だちの泥団子を見せ合う。	・子どもたちの発見やつぶやきに耳を傾け、共感する。	・友だちのきれいな形や固さの泥団子に憧れをもち、やりたい気持ちが出始めた。

4 幼児期の学びに向かう力を小学校へつなぐ取組

◎教師間での幼児児童理解と課題に対する実践交流

◎5歳児（幼保）と1年生の交流

話す聞く ～接続のためのねらいと援助～

○ねらい ★援助

	3歳児	4歳児	5歳児	1年生
姿勢保持・聞き方	○先生の近くに集まり話を聞こうとする。 ★手遊びなどで楽しい雰囲気をつくり、話を聞く姿勢につなげていく。	○いろいろな状況で話が聞ける。 ★視覚支援や集中できる環境によって、話が聞ける姿勢づくりをする。	○聞く姿勢や話す人を意識して聞く。 ★いろいろな体勢や場所で聞けるように環境や時間をつくる。	○よい姿勢「ぐーぺたぴん」を意識する。 ○話す人を見る。話す人におへそを向ける。 ★「ぐーぺたぴん」の合言葉を使って、気付かせる。 ★話を聞く環境が整ったら話を始める。

(一部抜粋)

5 研究の成果と課題

◎成果

仮説1 主体的に取り組む姿勢とは

- ・基本的な生活習慣を身に付けて園生活が送れることを基本とし、安定した生活を積み重ね、楽しんで遊んだり友だちと生活したりすることで意欲的に過ごせるようになる。
- ・強い心を育てるために、教師は遊びや取組を認め、結果にとらわれず過程を大切にすることで、友だちとの違いを知り、自信をもって目標に向かい取り組めるようにしなければならない。

仮説2 学びを育てる環境とは

- ・時期にあった素材や自然に触れる機会を充実させていくことにより、身近な環境が魅力的なものとなり、繰り返し遊びを展開していける。没頭して遊ぶための時間や場所の保障と、様々な場での体験や遊びの経験を積むことが遊びを創り出す力につながる。
- ・教師は、発達に応じた遊びを意識し、その時期の自然にふれる機会を逃さず子どもたちに働きかけ気付かせながら、教師自らも自然環境などを敏感に感じ取れる豊かな感性をもち、保育に生かしていかなければならない。

仮説3 友だちづくりとは

- ・友だちと一緒に生活したり遊んだりする居場所があることで安定した関係が築け、思いを出し合いながら相手の思いに気付き、試行錯誤しながら遊べるようになる。
- ・教師は、一人ひとりの葛藤を乗り越えられるよう育ちを踏まえた受け止めをしていくことが大切である。また、友だちを意識し協同した遊びにつなげるために、発見や気付きを伝え合う振り返りの時間を充実させなければならない。

◎課題

- ・基本的な生活習慣を身に付けておくことは、意欲的に遊びに向かえる力であり、就学後の学習に対する意欲につながっていることを保護者にも啓発する必要がある。
- ・多様な仲間と生活する中で、個々の姿や個性を大事に認め、一人ひとりが生かされる仲間づくりに努めたい。
- ・子どもたちは、日々の生活の中で、うまくいかなかった時に心の弱さが見られることもある。自分たちで問題解決しながら乗り越える力を身に付けるための環境や教師の援助を見直していきたい。
- ・発達年齢に応じた遊びを優先してきたため異年齢との交流による遊びの育ちを見通せなかった。今後は、環境を工夫し自然に交流できるように教師間の連携を図っていきたい。
- ・互惠性のある交流となるよう、今後は園からも積極的に小学校へ働きかけていきたい。

研究主題：「自ら遊びに参加し、友だちと夢中になって遊べる子を目指して」

～やってみたい、やってみよう、もっとやってみたい～

1 主題設定の理由

本園では、長時間テレビやゲーム機に向かっている子どもが年々増加し、人(友だち、教師など)とコミュニケーションがうまく取れない傾向が見られる。そのため、自分の思いを相手に上手く伝えられず、教師に依存する姿が見られる。また、園の様々な活動に対してやってみようとチャレンジする姿も見られるが、失敗をおそれて、消極的な子も多い。

そこで、子どもたちが主体的に遊びに参加し、さらに友だちと共に遊びの楽しさを追求し遊び込めるよう、教師が子どもの興味や関心に気付き、遊びが深まるように援助したり、子どもたち同士が思考錯誤しながら、繰り返し遊べる環境を工夫したりする必要があると考え、本主題を設定した。

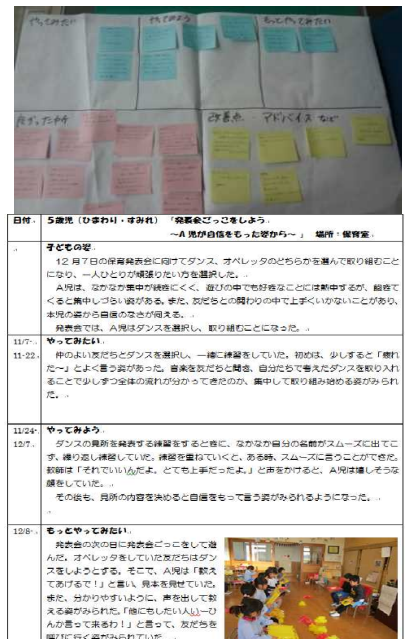
2 研究の方法

① 子どもたちが主体的になって遊ぶ姿を記録に取る。

- 園内研究会では、「やってみたい」「やってみよう」「もっとやってみたい」と感じる子どもの姿を記録に取り、全職員で共有する。また、様々な視点から子どもの姿が読み取れるように、小グループに分かれて、よりよい援助や環境について探っていく。その後、全体でどのような意見が出たかを共通理解する。

② エピソード記録と考察

- 各クラス、遊びのエピソードを記録に取る。まずは学年で話し合い、考察し、環境や援助の良かった点や改善点をまとめる。その後、全職員で再びエピソード記録の考察を行う。エピソードは、遊びの変化や、個を追うなど、様々な視点から取っていく。



3 実践事例

【発表会ごっこをしよう～A児が自信をもった姿から～ (5歳児)】

② やってみよう

いきいき
意欲・好奇心・発見
思考・共同・工夫

A児は好きなことには集中できるが、飽きてしまったり、面白さが感じられなかったりすると、集中が持続しにくい姿があった。発表会を通して、本児が自ら面白さを見つけ、意欲的に取り組むようになってきたことから、その変化を、段階を経て記録していくようにした。

③ もっとやってみたい

きらきら
認め合う・自己発揮
共通の目的・繰り返し、試行錯誤

11/24-12/7

練習を重ねることで、発表会の見所を堂々と発表することができるようになった。
教師は「それでいいんだよ。とても上手だったよ。」と声をかけると、A児は笑顔を見せた。

① やってみたい

わくわく
安心・安全・興味

11/7-11/22

自分たちで考えたダンスを取り入れることで集中して取り組む姿が見られた。

12/8

発表会の翌日に発表会ごっこをすると、友だちに教えてあげようとするA児の姿がみられた。「他にもしたい人いないか、呼んでくるわ!」と大きな声で言い、他のクラスの友だちにも声をかけに行った。

4 幼児期の学びに向かう力を小学校へつなぐ取組

(1) 職員同士の交流

- ・町の「志の教育」「五愛十心」を柱とし、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの作成を一緒に行う。
- ・園内研・校内研の参観を積極的に行い、発達段階に応じた学びの芽生え・学びの基礎を探るきっかけとする。

(2) 園児(5歳児)と児童の交流

- ・音楽会のリハーサルを見に行き、園児はあこがれの気持ちを持ち、1年生は年下の子に見せることで、自信をもてるようにする。(6/9)
- ・ドッジビーや工作を1年生に教えてもらうことで、園児は刺激を受け、1年生は思いやりの気持ちを育む。(11/9)
- ・5年生と学校探検を行い、小学校への期待を膨らませる。(2/16)



5 研究の成果と課題

(1) 成果 (○子どもの姿 ☆教師の支援、環境構成)

	やってみたい(わくわく)	やってみよう(いきいき)	もっとやってみたい(きらきら)
3歳児	○興味・関心・憧れの気持ちが生まれる ☆安心できる教師の存在や場所を作る	○年中児や年長児の遊びを模倣する ☆異年齢の交流を図る	○同じ遊びを、工夫しながら繰り返し楽しむ ☆教師に認めてもらうことで意欲へつなげていく ☆子どもの思いや言葉を友だちにつないでいく ☆子どもたちが試せるように素材を用意しておく
4歳児	○安心できる教師・友だちと一緒に挑戦する ☆友だちの姿を回りに伝えていく	○自分なりに試したり工夫したりして遊ぶ ☆ヒントとなるような言葉かけや試せる環境づくりをする	○友だち同士で会話して遊びを進める ☆子どもの願いを実現するための援助や工夫が必要である
5歳児	○友だちに刺激を受けることで意欲がわく ☆友だちのことに目を向けられる声かけをしたり橋渡しをしたりする	○今までの経験を活かしてやってみようとする ☆友だちと相談・役割分担できる環境を作る	○友だちと試行錯誤しながら遊びを楽しむ ☆より本物に近い物が作れる材料を子どもたちと相談して準備し、意欲的に遊べるようにする

(2) 課題

- ・遊びにおいて、振り返りの時間がとても大切であることがわかった。今後も自分なりの言葉で、楽しかったことや困ったこと、感じたことを伝えていけるようにしていく。また、興味や関心を多様に広げていけるように、発達年齢に合わせた振り返りの仕方を探求していき、次の遊びにつなげていけるように努めたい。
- ・教師がどんな経験をしてほしいのか、目的は何なのかを明確にすることで、子どもが夢中になって遊び込める環境の再構成を日々行っていく。
- ・小学校との接続は、この研究を通して、園内研究会・校内研究会相互に参加し合えたことで、小学校の先生との連携が深まった。このことをステップとし、より具体的・計画的なアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを進めていき、検証していく。

「学びの基礎」の3つの要素からみる幼児期と児童期のつながりの概念図

幼児期の子どもは、遊びを中心とした生活の中で、様々な対象(人・もの・こと)との直接的・具体的な体験を通して学んでいきます。幼児期の教育は、5領域の内容を遊びや生活を通して総合的に学んでいく教育課程に基づいて実施されています。

児童期の教育は、各教科の学習内容を系統的に配列した教育課程に基づいて実施されています。

幼児期 学びの芽生え

児童期 学びの基礎

学ぶ力の向上

学びに向かう力

自己制御や自尊心などの
非認知的能力

様々な遊びの中で、興味や関心をもち、頭も心も体も動かして、楽しんで取り組む。

学びに向かう力

主体的に学ぶ姿勢

意欲的に学習をする能力や態度、学ぶことの楽しさや成就感の体得、知的好奇心をもつ。

学び方

具体的な活動や体験を通す。問題解決的な能力や態度、試行錯誤を繰り返してやる。

探究的な学び

身の回りの「人・もの・こと」に直接関わり、幼児なりのやり方で、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

好奇心・探究心

学習規範

姿勢や態度、学習用具の使い方、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと。

学びの自立

生活に必要な活動を自分でし、友達と生活する中でできまりの大切さに気付いたり、考えて行動したりする。

自立心

幼児期から児童期への接続期には、学校生活に円滑に移行していくためのアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムが必要となります。

遊び

幼児教育

- ・5領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)を総合的に学んでいく教育課程等
- ・子どもの生活リズムに合わせた1日の流れ
- ・身の回りの「人・もの・こと」が教材
- ・総合的に学んでいくために工夫された環境の構成 など

安心 成長 自立

5歳児3学期
アプローチカリキュラム

1年生1学期
スタートカリキュラム

接続期

学習

小学校教育

- ・各教科等の学習内容を系統的に学ぶ教育課程
- ・時間割に沿った1日の流れ
- ・教科書が主たる教材
- ・系統的に学ぶために工夫された学習環境 など

〔「スタートカリキュラム スタートブック」(国立教育政策研究所 平成27年1月)を参考に作成〕

幼児教育の内容と小学校教育の教科等との関連

国語	算数	社会	総合的な 学習の時間	理科	音楽	図画 工作	体育	道徳	特別 活動
		生活科							

スタートカリキュラムを通じて、各教科等の特質に応じた学びにつなぐ

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

健康な心と体

充実感や満足感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせながら取り組むようになる。

自立心

自分でしなければならないことを自覚して行い、諦めずにやり遂げることで満足感や達成感を味わいながら、自信をもって行動するようになる。

協同性

互いの思いや考えなどを共有し、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり遂げるようになる。

道徳性・規範意識の芽生え

してよいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するとともに、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、決まりを作ったり守ったりするようになる。

社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもったり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に一層の親しみをもったりするようになる。

思考力の芽生え

思い巡らし予想したり、工夫したりなど多様な関わりを楽しみ、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、身近な事象への関心が高まったり、自然への愛情や畏敬の念をもったりするようになる。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりして、数量・図形、文字等への関心・感覚が高まるようになる。

言葉による伝え合い

言葉を通して先生や友達と心を通わせ、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたことを言葉で表現して楽しむようになる。

豊かな感性と表現

感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりするようになる。

アプローチカリキュラムを通じて、学びに向かう力を小学校教育につなぐ

健康

人間関係

環境

言葉

表現

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」にねらいや内容として示されている5つの領域

〔「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日中央教育審議会）を参考に作成〕

中学年
低学年

-13-
幼児期

学びの芽生え(幼児期)

- **体を動かす** **健康**
 - いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
 - 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- **自立心を育てる** **人間関係**
 - 自分で考え、自分で行動する。
 - 自分でできることは自分でする。
 - いろいろな遊びを楽しみながらやり遂げようとする気持ちをもつ。
- **興味や関心をもつ** **環境**
 - 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
 - 日常生活の中で数量や図形、簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- **本に親しみ、想像する** **言葉**
 - 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
 - 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。
- **伝え合う楽しさを味わう** **表現**
 - 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
 - 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

主体的に学ぶ姿勢

学びの基礎(児童期)

【意欲的に学習をする能力や態度】

- 学ぶことに興味をもつ。
- 分からないことは、自分で調べる。
- 自ら考え行動しようとする気持ちをもつ。
- がんばったことやできるようになったことで自信をもつ。
- 新たな問題に果敢にチャレンジしようとする。
- 思いきり体を動かして汗をかく。

なぜかなあ？
ふしぎだなあ。

【学ぶことの楽しさや成就感の体得】

- 人と関わりをもつことにうれしさを感じる。
- 自分だけでなく、仲間と協働して解決する。
- 友だちとの触れ合いの中で、自己を発揮する。
- 認められることで自己存在感や充実感を味わう。
- 新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わう。

やったあ！
自分でできたよ。

【興味や関心をもつこと】

- 文字や数に興味をもつ。自然に興味をもつ。
- 興味や関心が芽生えたことに夢中になる。
- もっとやってみようという気持ちをもつ。

わっ！
おもしろそう。

指導のポイント

安心 成長 自立

■ しっかりほめる、認める、評価する

- ・周りの子どもも「できているな」と分かることや子ども自身も「できているな」と感じていること、自分で気づいていないこと(教師が価値付ける)をほめる。
- ・自ら進んでしてきたことや進歩がなくても続けていることを認め、定期的に、客観的な評価をする。

■ 知的好奇心を刺激する

- ・子どもが感性を揺さぶられることによって芽生える興味や関心を大切にすること。
- ・少しだけ難しいこと(さらに良いこと)を伝えて、期待していることを示す。
- ・既知と未知との「ずれ」を意識させる。
- ・予想を取り入れて、課題を自分事にする。

■ 共感する

- ・「分かった」瞬間一緒に喜び、子どもの思いに寄り添う。



学びに向かう力の育成につながります

低学年において、主体的に学習をする姿勢や態度、学ぶ事の楽しさや成就感を体得することは、どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力の育成につながります。学ぶことの楽しさや成就感を体得するためには、具体的な活動や体験を通すことが重要です。

- **見通しをもつ** **健康**
 - 生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- **人と関わる** **人間関係**
 - 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
 - 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- **発見を楽しみ、考える** **環境**
 - 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
 - 身近な物や遊具に興味をもって関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- **自分の言葉で話す** **言葉**
 - したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
 - いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- **表現を楽しみ、工夫する** **表現**
 - 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
 - いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。

学び方

【具体的な活動や体験を通すこと】

- 直接触ったり、操作したりして考える。
- 身近なものやことを見たり、聞いたりする。
- 教室の中だけでなく、外に出て活動する。
- 人と関わり、一緒に活動したり、つくったりする。
- 身の回りにあるものを自分と一体として理解する。

指導のポイント

安心 成長 自立

■ 身近な事象を取り扱う

- ・子どもたちの身の回りにあるものを教材化する。
- ・子どもにとっての必然性の高いものを教材化する。
- ・子どもが思いついた方法をすぐに試せるような環境を用意する。

■ 活動に没頭できるようにする

- ・時間や場所にゆとりをもつ。
- ・上手くいかなかった理由を考えて失敗を生かす。
- ・繰り返し学ぶこと、あきらめずに学び続けることを価値付けて、意欲を持続させる。

【問題解決的な能力や態度】

- 自分たちで問題を見つけて、解決しようとする。
- これまでに学んだことを使って問題を解決する。
- 自分なりのやり方で取り組む。
- 環境に好奇心や探究心をもって関わる。
- 仲間とともに問題を解決する。

【試行錯誤を繰り返すこと】

- 試行錯誤を繰り返す中で、新たなものを創造する。
- 繰り返し努力することをいとわない。または、楽しむ。
- 失敗してもあきらめずに、最後までやりきる。

見てみたい。
さわってみたい。
やってみよう。

あっ！
できそう。

もっとやってみよう。



■ 子どもの多様性を保障する

- ・子どもの創意工夫を生かし、イメージを広げる。
- ・出来栄ではなく、学びの過程を評価する。
- ・一人ひとりの表現や思いを大切に集団づくり。

■ 対話的な学びにする

- ・グループで学び合う活動や、自分の考えを伝え合う活動を取り入れた対話的な学びにする。

探究的な学びにつながります

子どもが試行錯誤を繰り返しながら学んでいく「学び方」は、中学年以降の探究的な学習につながっていきます。一回で成功することよりも、トライ＆エラーを繰り返して学ぶことに価値付けをしていきたいものです。自分なりのやり方や多様性を保障することは、「何を学ぶか」から「どのように学ぶか」という、問題解決的な学びのプロセスを大切にすることであり、深い学びにつながっていきます。

- **健康な心と身体を育てる** **健康**
 - 健康な生活のリズムを身に付ける。
 - 生活に必要な活動を自分でする。
- **規範意識の芽生えを培う** **人間関係**
 - よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
 - 友達と楽しく生活する中でできまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- **生命やものを大切にする** **環境**
 - 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
 - 身近な物を大切にする。
- **話を聞く、話す** **言葉**
 - 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
 - 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
 - 親しみをもって日常のあいさつをする。

学習規範

【姿勢や態度】

- 先生や友達の話をしっかり聞く。
- 学習中、姿勢を保つ。
- 集中して課題に取り組む。
- 身の回りの整理整頓をする。
- 授業と休み時間の区別など時間を守る。
- 学習課題にすぐに取り組む。
- 下敷きを敷いて、ノートをとる。板書を写す。

【学習用具の使い方】

- 学習に必要な用具が揃っている。(不要な物は持ってこない)
- 正しい鉛筆の持ち方で文字を書く。
- 学習用具を大切に使う。

【話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと】

- 黙って手を上げて、指名されてから発表する。
- 話を聞くときは、話し手の目を見る。
- 自分の考えたことを書く。

指導のポイント

安心 成長 自立

■ 共通理解から共通実践へ

- ・全校で統一した指導をする。
- ・誰もが分かるようにする。(例：各教室に掲示する、ガイドブックを作る、保護者にも説明する等)
- ・できたことをほめ、認めることで、学習習慣の定着を図る。

■ 成長を見守る

- ・指導の重点を絞って取り組む。
- ・変化が見られるまで粘り強く続ける。
- ・実現可能な目標を立ててレベルアップを図る。

片づけると
気持ちいいな。

準備ができてい
ると安心。

みんなに知ら
せたいな。

■ 自立への基礎を養う

- ・自分でできることは自分でさせる。
- ・自分たちで決めた約束は必ず守らせる。
- ・成長や伸びを子どもにフィードバックする。

学びの自立につながります

学びの姿勢や態度の他、学習用具の使い方や読んだり書いたり聞いたり話したりすることにおける学習規範は、集団や実生活の中で人との関わりを通して、体験的に育成されます。実体験を通して育成された学習規範は、自ら学ぶ学びの自立につながります。

平成28年度
学びに向かう力育み事業
取組のまとめ

平成29年3月発行

発行

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課
〒520-8577 大津市京町四丁目1-1